

審議（会議）結果

審議会名称 神奈川県生涯学習審議会（令和8年度第1回）

開催日時 令和8年8月19日（水）14時00分から16時00分

開催場所 神奈川県庁西庁舎 7階 701会議室

出席者【会長・副会長等】

井口 亘 （公募委員）

石井 岳夫 （神奈川県公立小学校長会総務部長）

伊藤 真木子 （青山学院大学教授）【副会長】

大橋 昌行 （一般社団法人神奈川県経営者協会員）

大村 悠 （神奈川県議会議員）

黒木 真一郎 （神奈川県PTA協議会執行役員）

小池 茂子 （聖学院大学長）【会長】

佐藤 秀樹 （公募委員）

下条 章子 （ピアサポーター）

すとう 天信 （神奈川県議会議員）

夏井 美幸 （神奈川県公民館連絡協議会長）

浜野 達也 （神奈川県博物館協会副会長）

平井 宏典 （和光大学教授）

舟田 彰 （神奈川県図書館協会員）

吉原 弘子 （神奈川県社会教育委員連絡協議会理事）

（五十音順）

次回開催予定 未定

所属名、担当者名 生涯学習課 田村、野崎

掲載形式 議事録

議事概要とした理由 ー

審議（会議）経過

1 開会＜事務局＞

2 あいさつ＜生涯学習部長＞

3 議事 社会教育施設の機能強化について

議題（1） 部会報告「教育普及機能の強化について」

○小池会長

皆様こんにちは。私たちが生涯学習審議会です。本日はその中で議題の柱がございまして、まず一つは、前回の本審議会の開催日から今日までの間に博物館検討部会が開催され、今回、県立の博物館・美術館に来館した子ども達にアンケート調査をしました。結果の分析を踏まえ、「教育普及の機能の強化について」というテーマで審議をしてくださったということです。本日は博物館検討部会を代表して、平井委員より、資料1の御説明と御報告をいただきたいと思います。平井委員、よろしくお願いいたします。

○平井委員

博物館検討部会の平井でございます。資料1について御説明させていただきます。

【資料1により説明】

（「1 議論の整理」）

まず議論の整理として、「①来てもらうためには」「②学習機会の提供の充実を図るには」「③知ってもらうためには」「④活動を正しく評価するためには」と整理しており、これまで議論してきたのが、主に①、②、③です。もちろんまだ結論は出ていませんので、これからも引き続き議論していかなければならないところです。

「④活動を正しく評価するためには」については、まだ手付かずの状態ですので、これから議論していただければと思います。今回の資料は主として、特に②、③を中心にまとめています。

（「2 アンケート集計結果（概要）」）

これまで、本審議会でも議論する中で、博物館の利用者は様々な世代がありますが。特に子ども世代の利用が家族やその周囲を巻き込む起点になるということで、学校連携をはじめとする子ども関連の言及がなされた前回審議会の内容を踏まえて、子どもの意見や実態を調査しました。調査対象館は県立の博物館・美術館となっております。なお、御承知の通り、現在、歴史博物館は大規模改修中で令和7年1月1日から休館しておりますので、アンケートは実施しませんでした。

調査日は、令和8年3月14日（土）と15日（日）、場所は生命の星・地球博物館で開催されていたミューズ・フェスタ2026でございます。このミューズ・フェスタは、生命の星・地球博物館の開館日を記念して、毎年3月に開催しているイベントです。館内、館外の全体を使って、ワークショップなどが2日間にわたり繰り広げられ、常設展、企画展も、この2日間は入場無料ということで、多くの来場者が見込める機会に、アンケートを実施いたしました。また、それとは別に、3月19日から4月4日までの間、金沢文庫、近代美術館（葉山館）、そしてミューズ・フェスタ以外の日程で、生命の星・地球博物館の3館でアンケートの回収ボックスを設置して行いました。なお、回答方法は、用紙に記入または電子申請システムに入力していただくこととしました。

（「3 アンケート集計結果（回答者の属性）」）

回答は、合計で359件となりました。この合計の数値を見ていただくとおり、ミューズ・フェスタのみで250件回収しており、全体の70%近くを占めております。ミューズ・フェスタ以外で回収した生命の星・地球博物館の57件を加えますと、実に全回答者数のうち85%近くが、生命の星・地球博物館関連の回答者となりますので、回答者の属性として、自然史や科学系を好む方たちの声が少し強めであるということは、

81 この後の回答の中でも御留意いただきたいと思います。

82 基本的に、網掛けになっているところが各項目で多いところとなっております。利
83 用回数は、ほとんど単館で見ますと、「1回目（今日がはじめて）」が多いですが、ミ
84 ューズ・フェスタに関しては「3回以上」の回答がボリュームゾーンになっています。
85 このことから考えると、ミュージズ・フェスタに関しては、毎年3月に継続して開催し
86 ていますので、認知度が高く、親しまれたイベントとなっており、来館される方が多
87 いことが想定されます。

88 （「4 アンケート集計結果（広報戦略）」）

89 同伴者についてですが、どの館も「おうちの人と」という回答が最多となっております。
90 子どもを対象としたアンケート調査ですので、子どもが一人で来るということ
91 は少なく、このアンケートを取るにあたり仮説であった、「子どもの来館を増やせば、
92 それに引きずられて保護者も当然来る」「1人を捕まえれば2人、3人となる」という
93 考え方が、この同伴者の内訳を見ても明らかになっていると思います。

94 情報源の内訳ですが、「インターネットやSNSで見た」「おうちの人に聞いた」という
95 回答が多くなっています。当然、子どもが自分で情報を仕入れる場合もあると思いま
96 すが、両親に誘われた、両親から聞いたということも多いことと思います。現在、小
97 学生の親世代は、30代、40代と想定され、インターネットやSNSに対して、非常に親し
98 みのある世代であると想定されますので、この「インターネットやSNSで見た」が非常
99 に多いのも、回答者の属性を表していると思います。

100 （「2 アンケート集計結果（事業戦略①）」）

101 回答者が求めている博物館事業ということで、回答の多かったところから合計3つ
102 取り出しをしました。最も回答が多かったのは、「くわしくなって知識を広げたい」で
103 した。このあたりは自然史系、科学系、歴史系もそうだと思いますが、どちらかとい
104 うと美術館よりも博物館系の利用者に多い回答だと思います。この回答が最多となる
105 のは当然だと思いますし、この回答でありがたいと思います。

106 2番目に多かった回答が、「イベントに参加したい（ものづくり体験やじっけん教室
107 など）」でした。これも若干ミュージズ・フェスタに引っ張られている可能性があるかと
108 思います。

109 他にばらつきなく多かった回答として、「写真を撮って思い出に残したい」というも
110 のがありました。博物館は撮ってはいけないものが、いまだ多い部分であります、
111 このニーズがあるということは理解しておくべき必要があると考えています。

112 施設の雰囲気については、近代美術館（葉山館）では、「しずかに落ち着いて楽し
113 みたい」と回答した層が、「気軽におしゃべりしながら楽しみたい」と回答した層をやや
114 上回っており、逆に生命の星・地球博物館では、後者が前者を上回っているという結
115 果でした。やはり美術館は、どちらかというとな静かに美術作品と向き合いたいとい
116 うことを志向されているお客様が多くいたということが窺えます。

117 その他の自由記述の回答として、「何かもので思い出に残したい」「ものづくりがし
118 たい」「収蔵庫を見学したい」「自分できれいな絵を描きたい」などのような意見も挙
119 がっておりましたので、書き出させていただきました。

120 （「2 アンケート集計結果（事業戦略②）」）

博物館・美術館の好きな点を見ると、新しい気づきを得られる点に魅力を感じていることが分かる一方で、「もっとこうなればいいな」と思う点として、「気軽に行けるようになってほしい」「移動動物園のように、移動式の実美術館があるとよい」「字を読むのが苦手なため、音声ガイドがほしい」「説明文にふりがながほしい」「体験シミュレーションがあるとよい」「さわれる展示がほしい」「故障中の展示物を直す」といった意見が挙がりました。まだまだアクセシビリティの面で、館に行くことや館の展示を楽しむことについてハードルを感じている、残念ながら距離感がある、といったことが分かりました。親しみに欠けているところがあると思います。そういう意味で、敷居が高く、身近に感じられる施設にしていく必要があるということが、このアンケートから読み取れると思います。また、展示品の解説が求められており、個々の自由な考察をサポートするような、体験的、直感的に理解できる内容を目指していくことが望ましいと考えられます。

（「3 現在の取組（学習機会の提供）」）

現在、県立の博物館・美術館でどのようなことがなされているかについてですが、学習機会の提供という観点から2点挙げています。

1点目は、来館しなくても学習できる機会の提供ということで、金沢文庫、歴史博物館、近代美術館は、神奈川県の中でも東側、そして生命の星・地球博物館は、小田原という箱根の入り口のような極端に西側に位置しており、県央部に県立博物館がなく、どちらか東西に寄っているというところで、来館しなくても学習できる機会の提供は重要であろうと考えられます。主に県立社会教育施設のWebコンテンツを集約して発信する「おうちでミュージアム&ライブラリー」というウェブサイトを作成して、各館がインターネット上で学習できる機会の提供を行っております。

2つ目が教育機関・民間団体との連携強化ということで、小中高で、学校主催事業への協力、他にもワークショップや講座、講師派遣、職場体験、インターンシップ、教員対象の講座や研修など、こういった様々な連携事業を通して、学習機会の提供を図っているということになります。

（「3 現在の取組（学校連携・地域連携事業）」）

実際の取組内容ですが、非常に細かく、実施回数や参加者数が記載されています。一つ一つの説明は省かせていただきますが、どの館も連携講座や受け入れ等、積極的に回数を実施し、参加者数も1万人や3万人というような数を記録しております。連携事業についてはしっかりと各館で取り組んでいると思います。

（「3 現在の取組（生命の星・地球博物館が目指す展示更新イメージ）」）

歴史博物館は令和8年10月17日に大規模改修が終わり、再開館いたします。一方で、生命の星・地球博物館では常設展の一部リニューアルに向けて検討している最中でございます。

展示更新のイメージとしては、「博物館資料の魅力がもっと伝わる展示」「誰もが楽しく学べて分かりやすいインクルーシブな展示」など、近年求められていることを踏まえて、自然史・科学系の博物館としての展示だけではなく、「観光地箱根の入り口を強みとした展示」や「学芸員の活動を知り、博物館バックヤード（収蔵庫等）への理解を深める展示」など、今日的な博物館に求められる機能や役割を踏まえた展示のあ

り方が検討されています。

（「3 現在の取組（社会教育施設評価書）」）

評価については、これからの議論として積み残しているところではございますが、現在は、教育委員会として第三者評価というものを実施しております。令和元年度に歴史博物館、令和2年度に生命の星・地球博物館、令和4年度に金沢文庫、令和6年度に近代美術館（葉山館、鎌倉別館）の評価が行われました。評価指標としては下に記載しているように、大きな柱とそれに紐づく骨子の中柱として利用者満足度や教育普及事業への参加者数など、様々な観点から評価を行っております。これからの議論では、すでに先行して行っているこれらの評価指標が参考にできるのではないかと考えています。

（「4 子どもから大人まで、誰もが楽しめる博物館を目指して」）

最後に、アンケートの集計結果などを踏まえ、本部会で伊藤部会長をはじめ、4名で議論を重ねて参りました。その中で、「くわしくなって知識を広げたい」という博物館の非常に本来的な機能を踏まえたニーズに対してですが、「ユニバーサルデザインやデジタル技術を用いた誰もが理解しやすい解説の充実」や「常設展示を定期的に更新して、いつ来ても新しい発見を得られる展示づくり」「利用者の知りたい度に応じて学びを深められる仕掛けづくり」「デジタルアーカイブ資料の活用やオンライン講座の実施など、館内での利用機会を増やす」というようなことを、主として考えています。

「イベントに参加したい」という声もありましたが、基本的にワークショップ等は必要な材料や対応のできる限度がありますので、どうしても申し込み制になってしまうところですが、「申し込み不要で利用者が気軽に参加できるイベントを充実させる」ということで、時にはいきなり飛び込んでも参加できるというようなものがあると、より博物館を自由に親しみやすく、より主体的に楽しんでいただけるということもあるだろうと考えています。申し込み不要ということを積極的に考えていくべきであるという意見が出ました。

「写真に撮って思い出に残したい」ということに関しては、著作権等の関係もありますので、なかなか簡単に実現できない部分もありますが、「撮影可能なエリアをもっと分かりやすく表示し、SNS等で共有してもらおう」など、単に「撮影○」「撮影×」という表示をするのではなく、撮影ウェルカムな雰囲気を出していても良いのではないかと議論がありました。

「博物館・美術館をもっと身近に」では、より具体的に、明日からでもできるようなことということで、具体案をいくつか提示しております。心理的に距離感があることもありますので、例えば、会話OKの日を作るなど、近寄りやすい博物館に、気軽に来られるような日を作るというのはどうかという意見がありました。現在でも、都内の美術館では、休館日を利用して、ベビーカーで来館をウェルカムにするといった、保護者の方に優しい日や、子どもがいくら騒いでもいい日というようなものも作られています。そういった日を、県立館でも作っていくのはいかがでしょうか。また、「博学連携事業をメニュー化するなど、博物館の活用方法を分かりやすく情報提供する」ということで、例えば、学校連携事業などでは学校の先生も年度の当初には時間が決

まっているのです、いきなり飛び込みなどでは使いづらい、どのように博物館を利用すれば良いか分からない、どんなことをやってくれるのか分からないという課題が考えられます。問い合わせをしないと分からないというようなことがあると思いますので、県立4館で統一して、こういうことができますという具体的なメニューを提示して、その中から選んでいただくといったこともあれば、学校の先生もより気軽に検討ができるのではないかという意見も出ました。他にも「地域との接点を増やし、親しみをもってもらおう」ことや、一番強力な支援者、協力者たる「ボランティアやメンバーシップの制度を強化するなど、県民との協働を深める」ことも考えられました。例えば、近代美術館（葉山館）は葉山しおさい公園に隣接していたり、歴史博物館は馬車道の素晴らしい景観を持っていますので、そういったことを含めて、「ランドスケープを含めた魅力を伝えるなど、多様な楽しみ方を発信する」。また、「情報発信のあり方を多様化する（Advertising, Public Relations）」というところで、アンケートでは、SNSで知ったという方々もいました。いつもどおりポスターやチラシを作り、いつもどおりのところに貼ってください、置いてくださいとお願いするだけではなく、より広く知っていただくための情報発信のあり方を検討していくべきという意見が出ました。

少し長くなりましたが、以上が博物館検討部会で議論したことの報告になります。私の説明で不足していることがありましたら、部会委員の皆様から補足していただければ幸いです。以上です。

○小池会長

アンケートを集計していただきながら、多くの人たちが行ってみたいと思える社会教育施設にしていくために何が必要なのだろうか、そういった論点について今まで議論してきたことを踏まえて、最後の13ページのところに集約してくださっていて、これが答申のポイントになっていくということをお話を伺いながら考えた次第です。博物館検討部会では、平井委員以外にも意見を交換してくださり、最後のページができていくというお話をいただいています。その議論に加わってくださった部会委員の皆様から、補足説明というような形で御意見を受けたいと思いますが、伊藤副会長いかがですか。

○伊藤副会長

私どもは県立の博物館を事例に検討してまいりました。諮問内容としては、「社会教育施設の機能強化について」ということですので、この場ではより広い観点から御意見を伺えたら良いなと話をしてきました。

○小池会長

ありがとうございます。浜野委員はいかがでしょう。

○浜野委員

平井委員にまとめていただいたとおりで、特に大きな不足があるということではないですが、本日の資料に沿って補足させていただきますと、今回のアンケート集計結果は、ミューズ・フェスタ2026で回収した件数が非常に多くて、その読み取りには、体験を重視している傾向が現れているのではないかと、注意の指摘がございました。これはイベント自体には非常に集客があるもので、必然的にこういう結果になったと思いますが、アンケートの集計の仕方として、ミューズ・フェスタを外した通常時の

来館者アンケートの結果と、ミューズ・フェスタを足した現在の結果と両方出して、違いが現れるものなのかどうかというのは見てみても良いのかなと、資料を見て思いました。また、対象として小学生だけではなくて、中学生、高校生、大学生なども含めて、博物館がそれらの年齢層にどれだけアピールできるのか、来ている方にどのように思ってもらえているのかというところは、日本の博物館にとっても、今後非常に重要な観点になっていきます。小学生の年代で、自主的に博物館に行きたいという子どもは、人数としては多数派ではないと思います。非常にマニアックな子どもで、専門情報が並んでいるから、それを度々見に行って自分の知識欲を満たすという、好奇心と知識に溢れる少年少女もいらっしゃいますが、大抵は、両親に関心があり、子どもにこういう経験、体験をさせたいという思いを持っていることが多いです。イベントに小学生を引き込むには、その両親を引き込む必要があるというところが、一つ留意点として挙げられると思います。

また、比率として博物館に対して子どものニーズが一番多かったのは、「くわしくなって知識を広げたい」という、非常に博物館のベーシックな機能でした。我々としては非常に良い結果が現れたなと思っています。いろいろ変化形を使ったり、工夫したりしても、基本的な部分、根本的な部分はずれてはいけません。本物をたくさん収蔵して、それをあらゆる人々に、分かりやすく、魅力的に伝えていくというのは、博物館の本質的な存在価値のようなもの、博物館の大切な機能ですので、そこは絶対外してはいけないところだということが今回のアンケートから確認できました。

また、「イベントに参加したい」という声が多かったというのは、ミューズ・フェスタの票が反映していると思います。イベントというだけではなく、「触る」「体験できる」「動かすことができる」など、静的な鑑賞だけではなく、動的な要素を博物館に期待するというのが、ニーズとしてあるのだらうと思います。イベントに関して言うと、申し込み不要なものや自由参加型のもの、注意事項が必要なものには事前に募集かけるなど、いろいろな形式があって良いと思いますが、回数を定期的に行うことによって、博物館の魅力を感じてもらえる機会が増えるのだらうと考えています。

○小池会長

今回の答申の中で、子どもたちが利用者である社会教育施設の教育普及機能をさらに強めていくために何が必要かというのは、もちろん今回の調査の結果等が裏付けになっていくのが良いと思います。また、社会教育施設は、学習機会をより広い人たちに届けていくものであるということで、「Education more Education（教育が教育を呼ぶ）」ということが言われております。要するに学ぶ機会に恵まれていた人たちが、さらに多くの学びの機会に結びつけられていく。既に社会教育施設に行って楽しむことを知っている親子が、もっと社会教育施設を使い、イベントにも参加し、日常的に図書館、博物館、美術館にも行く、ということです。しかしながらアンケートにもあったように敷居が高いのが現状です。学ぶことにハードルを持つ人たちは必ずいると思います。やはり自分たちのような者が行く場所ではないだらうと思う人たちがいないだらうかという問題があります。それは子どもや親御さんの中にもあると思いますし、インクルーシブの観点を例に挙げると、誰かの介助を必要としないと自分の力で行くことができないのだと感じている人たちの、そういったハードルをクリアしてい

くために必要な社会教育施設としての機能、より多くの人たちの学習の機会を作り出すためには、どんな配慮が必要なのか。子どもだけではなく、中学生や高校生、青年期、成人、そして高齢者、また認知症が進んでいる人たちに対して、博物館の収蔵物などを見せて、自分の若い頃、頑張っていた当時の物語を語らせるという教育プログラムをすると、認知する力が覚醒されていくといった報告もあったりします。このように、社会教育施設には様々な属性の方に利用いただいておりますが、今回のアンケートでは子どもを被験者として調査を行っていただき、大変ありがたいまとめをしてくださいました。

さて、ここから話し合うことですが、皆が話し合っているうちに何を話しているか、分からなくなると困るということで、事務局にはホワイトボードを使って話し合うテーマ書いていただきます。

「学習機会をより広く多くの人たちに届けるために何が必要か。」

このような切り口から、補足的に何かお話をいただけるとありがたいなと思っておりますが、いかがでしょうか。

○舟田委員

私自身も、先ほど小池会長のお話にあった、認知症の方に対しての図書館サービスということで、届けていくというよりも、むしろ来ていただくようなコンテンツとして、本を用いて回想してもらうといったことをやりました。「あの頃会議」と言いまして、地域の中に、若年性認知症の方、特に65歳未満の高齢者の方たちが集まる就労支援施設がありまして、公共図書館とコラボし、その方たちを図書館に連れてきて、平成時代のバブルの頃の新聞の号外を集めた本を持ってきました。また「週刊20世紀」という現在は廃刊となっている雑誌を持ってきて、皆でこれを見ながら、30～40年前のあの頃に戻るといった内容でした。そんな取組を行うと、ものすごく話が盛り上がります。私は図書館で、本という切り口で取り組みましたが、先ほどお話があったように、今度は博物館資料でやるということもできるのではないかと思います。例えばパッケージにして、こういうシステムに持っていく形で展開できるファシリテーターみたいなものが、別に学芸員が出てなくても、養成講座みたいなものを受けて、介護施設の方がファシリテーターとして行うというような形に変換できないかなと思いました。何らかのきっかけみたいなもの、どのようにして接点を作るのか、まずはモデルケースみたいなものを一つ、二つ、実際にやってみて、そこで検証しながら、全県に展開していくといったような使い方も博物館ではできるのではないのでしょうか。

また、先ほどの報告資料の説明に出てきました、「ランドスケープを含めた魅力を伝える」という観点についてですが、神奈川県は観光地的なところが多いですね。例えば箱根や小田原、三浦半島など、そういった観光地と社会教育施設のコンテンツを掛け合わせて見せていくというようなコンテンツを作っていくと、地元商店街も活性化しますし、自治体も活性化します。要はただそこに来て、そこからさっと帰ってしまうのではなく、地元にお金を落としてもらい、地域の活性化につなげていくことも大切ではないのでしょうか。もう既にやっているのかもしれませんが、地元の商店街などと連携しながら、経済的な面での地域活性化につなげていくことも可能ではないかと思った次第です。

○小池会長

ありがとうございます。認知機能が落ちていた人たちが、一つの媒体を皆で共有して、回想しながらその物語を一人一人の参加者と語り合う。ただの愚痴で終わらせるのではなく、教育的な目標に向けて、このプログラムを牽引してもらう指導者を養成していくということですね。回想法と呼ばれる手法になりますが、高齢になり、記憶力が低下し始めている人たちが、昔の自分がよく使っていた黒電話などを見て、話が盛り上がることで、脳が覚醒していくということがあったり、頑張って生きていくのだという思いが自分の中にもう一度現れることで、セラピー的な要素と教育的な要素があります。このように、博物館と高齢者の施設など、教育の現場と福祉の現場をつなぐことも出来るかと思います。また先ほどの舟田委員の事例では、昔の大きな出来事の号外などを皆で読んで、それについての思い出を語り合うというグループワークをしたということですが、そういった高齢者の方たちを対象としたプログラムをパッケージ化できないかというお話でした。そうすれば、どのように取り組んだら良いかわかるようになりますよね。社会教育施設に関わっている方たちが、そういったものを指導できるようになれば良いということでした。そういうプログラムを牽引していく人たちのため指導者研修みたいなものがあると、いろんな意味で元気でない高齢者の方たちにも使ってもらえる道が開けるのではないかという御提案ですね。

○舟田委員

ゆくゆくは県民がそれを見られると、県民同士、お互いに学び合えるというようなことにつながるかと思います。他人事ではなく、自分もいつか認知症になるかもしれない。そんな啓発的な面があることも考えると、やはり利用者同士が交流し合えるような場づくり、まさに養成講座を利用者が利用者へ提供するというような形にしていくなというのが一番理想的かなと思います。

○小池会長

現代は百年時代と言われていますが、元気に百歳まで迎えられる人はやはり少ないです。そんな人たちにとっても、家の中にいるか病院に行くしか居場所はないということではなく、こういった公共の施設が、いろんな人たちが来て良い場になっていけないかという御意見ですね。ただ、福祉施設ではなく、あくまでも教育施設ですので、こういうことをやるのだよと利用者の中に啓発されていく場であってほしいということです。

また、楽しく学んで、そして、お金を落としてもらうということになると、街づくりにもつながっていくのではないかというお考えもありました。「教育施設だから利潤の追求などを考えるのは良くない」などとあまり堅く考えず、商工会議所や観光地と連携して、街の中で社会教育施設を活用した新しいプラットフォームがあれば、来館者が増えていくのではないかという御提言だということによろしいですか。

○舟田委員

現に私が以前勤めていた川崎市立宮前図書館ではさぎ沼商店会とコラボしました。商店街にある各お店が「まちゼミ」というミニセミナーを行うのですが、その「まちゼミ」に関連するような本を図書館の「まちゼミ関連図書コーナー」で紹介し、予習や復習で図書館を使っていただきました。商店会なので、所管は川崎市経済労働局な

のですが、商店会の活性化につなげることができるよう、部署間で連携して取組を進めていきましたので、社会教育施設と地域団体が連携できないということではなく、街づくりに還元していくことは可能だと思います。この事例では、「図書館で知り、商店街に行く」「商店街から図書館に行く」というループをつくり出すことができましたので、博物館でも同様の取組はできるのではないのでしょうか。

○小池会長

ありがとうございます。社会教育施設に無料の人たちが来てもらうために、こういった学習機会により多くの方たちがコミットできるあり方について、今までもいろんな御意見をいただいていたのですが、もっとこういうこともあるのではないかというお考えがあれば、御発言いただきたいと思います。

○下条委員

ピアサポーターの下条章子と申します。今までのお話を伺っていて、いくつか考えてみました。まず、私自身が美術館や博物館に行った時に気になっていることとして、展示品そのものの説明はありますが、それがどこから来たのか。そこにどういった人の手が入り、今ここにあるのかという、展示品そのもののストーリーがあまり分かりません。来歴などのストーリーの説明をつけることで、その展示品への興味が湧くこともあるのではないかと考えています。

また、以前バックヤードの仕事を動画にして発信したり、バックヤードツアーをやってらっしゃったのを見たことがありました。皆さんに興味を持ってもらうという意味では、そういった取組を行っても良いのではないかと思います。

また、触るということもやはり重要です。しかし本物にそのまま触ることはできませんので、3Dプリンターを活用したレプリカを作成すれば、触ることができるようになるのではないのでしょうか。これだったら移動博物館とか美術館で持ち出すことができ、万が一壊れてしまったとしても問題がありません。これは使えるのではないかと思います。

また、最近公的機関がクラフトゲームとコラボして、街並みを再現しているのをニュースなどで耳にします。例えば生命の星・地球博物館など、地質関係の場合は、そういった方法でのデジタルデータの提供というのは勉強になるのではないのでしょうか。

さらに、博物館や美術館では、音声ガイドによる展示解説を行っていることがあるのですが、専門家の解説をその場で直接聞くということも大切です。その時の疑問を直接解決できるし、何より興味を引くことにつながりますので、頻繁ではないにせよ、解説ツアーを組んでみるのも良いのではないかと思います。

また、先ほど養成講座の話が出ていました。例えば、博物館や美術館独自の検定を作って免許制とし、上の段になったらそれを人前で解説してもらうといった取組をやっていくと、一般の方の解説員が増えるかと思っています。そうすると、その博物館や美術館の学芸員だけでなく、他のところでも説明ができる人が増えていきますし、階級をランクアップしていくこと自体を楽しんでもらえる方というのが出てくると思うので、こういう興味の引き方があっても良いのではないかと感じました。

○小池会長

県立の博物館では、ボランティアガイドの養成というのはなさっているのでしょうか。

○平井委員

詳細は事務方からお願いしたいのですが、生命の星・地球博物館では解説ボランティアの方がいらっしゃるというふうに聞いています。おそらく、歴史博物館や金沢文庫もいらっしゃるはずです。ただ、近代美術館は、ボランティアの方を活用した展示ガイドのようなものは、今はいなかったはずです。近代美術館の場合、企画展が中心になるので、毎回の企画展に合わせてコンスタンスに知識を入れていくというのは難しいという事情もあるのではないかと理解しています。

○小池会長

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

○黒木委員

今年度から参加させていただいています、神奈川県PTA協議会の黒木です。御説明ありがとうございます。本日お話のあった、地域の方との連携というのは非常に大事だと考えています。子どもたちの教育というのは、学校の先生と保護者だけで行っているわけではなく、地域と連携して子どもたちを育てていくということが非常に求められている時代だと認識しています。博物館と地域の方が連携し、地域から保護者へ、保護者から自分の子どもたちへとつながっていきます。例えば、鎌倉市では街全体を博物館として捉える「鎌倉ミュージアム」のプロジェクトを推進しています。鎌倉市には歴史的なものがたくさんあるので、そこから教育につなげようということで進められているようです。

また、本日のアンケート調査の結果では、子どもたちが博物館へ行こうと思ったきっかけとして、多くが「おうちの人に聞いた」だったことが分かりました。一方で「学校の先生に聞いた」は少ないことから、やはり保護者が子どもたちに「こういった博物館が良いよ」と伝えられることが、子どもたちの利用を増やすためには効果的なのだと思います。つまり、地域や保護者の横のつながりが大切なのだろーと感じました。情報の発信の仕方の工夫としては、我々のようなPTA協議会や地域団体との連携を深めることで、いろんな現場で保護者に情報提供することが良いのだろーと思いました。私自身、博物館で認知症の予防ができるというのは知らなかったです。知らないと距離感が出てしましますが、もし知っていたら、「子どもたちと一緒に勉強してみようかな」「歴史を少しだけ学んでみようかな」と思うきっかけづくりになると思います。そういった意味で、情報発信の仕方というのは、SNSによる情報発信も大切ですが、やはり人と人とのつながりという部分も非常に大切だと感じました。

○小池会長

ありがとうございます。他の委員もどうぞ自由に御意見をお願いします。

○夏井委員

神奈川県公民館連絡県議会の夏井と申します。私は公民館の代表として参加しておりますので、公民館やその他の社会教育施設との連携が大切だということも強く申し上げたいと思います。

以前私が実施した、幼児の親子を対象とした講座のお話にはなりますが、その地域ではタヌキが生息しているのだと説明すると、「本当にそんなものがこの地域にいる

のか」というような形で皆さん思っていたらいいと思います。そこで、博物館の方にくっつか標本を持参いただいて、それをもとに説明をしていただきました。タヌキの他にも、アライグマやハクビシンなど、比較的似通った標本を持ってきていただきまして、「この足跡はどの動物のものだろうね」と子どもたちとクイズ形式で、楽しみながら学習をするきっかけを作ってくださいました。骨格標本についてはむしろ保護者の方が興味深く触っていたと思います。そのときはたまたまおじいちゃん、おばあちゃんにも参加していただきましたので、もちろん幼児にも学習の機会ができますし、保護者も学習ができるということで、親子三代でそういった学習の機会を得ることができました。また、博物館だけではなく、図書館とも連携しようということで、司書の方にはタヌキに関する紙芝居や絵本の読み聞かせに加え、保護者の方向けに、家庭で読み聞かせができるようになるワンポイントアドバイスを行っていただきました。

このように、タヌキを例に話しましたが、身近なテーマを挙げれば、皆が主体的に考える機会にもなりますので、そうした機会を作っていくことが必要だと思います。また、こうした社会教育施設との連携の中で、公民館の職員はコーディネートをする役割を担いました。このような形で、身近にある公民館や図書館などと共催でこういった取り組みを行うこともできるかと思います。

また、最近国立の博物館に行き、音声ガイドを利用した際に、自分で何回も繰り返し聞きながら学習ができるというのは本当に素晴らしいと感じました。県の歴史博物館では「ポケット学芸員」というものが導入されていて、アプリケーションをダウンロードすればスマートフォンで解説を聞くことができるというものです。このように個別に学習を高めていくことができるのは素晴らしい取組だと思います。また、国立博物館では写真撮影が許可されている場所があり、私を含め皆が写真を撮っていたのですが、やはり訪れた記念にもなりますので、子どもたちだけでなく、大人にとっても良い機会だったなと感じました。著作権の問題で難しいようでしたら、旅行先でもよく見かけますが、日にちと博物館の名前が書かれたポスターを撮影できるようにするだけでも、いつ行ったのかが分かるようになると思うので、ぜひ作成してほしいと思いました。

また、疲れた時にすぐに休むことができるよう、展示室内にも椅子を設置していただくのが良いと思います。休憩所はあると思いますが、ずっと歩いて回っていると疲れてしまうので、休める椅子を各所に設置してもらった方が、誰でも参加しやすくなるだろうと感じました。

それと、前回も話題に挙がっていたガチャガチャは本当に面白いと思います。私は博物館にそんなものを置いて本当に良いのかと疑問に感じていましたが、国立博物館にも置いてありましたし、設置も委託業者に頼めばやってもらえると思います。県立の博物館にはそれぞれキャラクターがおりますので、来館者にとってはとても楽しいコンテンツになるのではないのでしょうか。

○小池会長

音声ガイドは基本お金がかかりますが、スマートフォンで聴ける「ポケット学芸員」が、無料で利用できるというのはありがたいですね。

○夏井委員

神奈川県立の施設では、歴史博物館で導入されているようです。広く全国的に加盟している施設が点在しているみたいです。

○小池会長

ありがとうございました。学習機会を広げていくための様々なやり方について御意見が挙がっていますが、校長先生でいらっしゃる石井委員から見て、学校現場と社会教育施設の連携の実態はどのような形になっているのでしょうか。

○石井委員

綾瀬市立寺尾小学校で校長をしております神奈川県小学校長会の石井でございます。生命の星・地球博物館には、4年生で遠足として伺っています。遠足で訪れた施設については、調べ学習を行うことが多いです。実際に行ってみて初めて「こういうものがあるのだ」と気付くことがあるので、例えばバーチャル空間を活用するなど、施設の中をインターネット上で確認することができるツールがあると、子どもたちも自分で調べやすく、関心を持ちやすいと思います。実際に現在のウェブサイトを確認してみると、写真やコンテンツは掲載されているのですが、自分で館内に入って行って、そこでこういうものを見ることができるというような、Googleマップのようなコンテンツがあると良いのではないかと思います。

また、先ほどの資料説明の際にお話のありました、写真の撮影についてですが、最近の学校現場ではタブレット端末を活用して学習を進めています。例えば校庭に咲いている花の写真を撮影して、絵を描いたり調べ学習をしたりしています。博物館に訪れた際も、自分のタブレット端末で写真を撮影することができれば、その後の学習にとっても役立ちますので、著作権等の問題はあるかと思いますが、ぜひ写真を撮影できるようになれば良いなと感じます。

もう一点、最近是个々の状況に合わせた個別学習が進んできておりまして、集団の中で一人の説明をずっと聞き続けるということが苦手な子どもが増えてきています。修学旅行などでもそうですが、自分が行きたいところにまず行きたいという人が多いです。そこで、スタンプラリーやクイズツアーなど、自分でその場所に赴き、主体的に必要なことを調べることによって、だんだんと全体像が見えていくといった工夫があると、子どもたちも意欲的に取り組んでくれるのではないかと考えました。

○小池会長

360度、没入型の体験コンテンツがあると、子どもたちの学習の手助けになるのではないかという御意見でした。県立の博物館ではどのようなコンテンツが揃っているのでしょうか。

○事務局

仮想空間で各館を訪問できるようにするといった取組について、過去に検討したことはございますが、費用面など様々な観点から、実現していないのが現状です。収蔵品をデジタル化してウェブサイトに掲載するデジタルアーカイブについては、各館で取組を進めています。

○小池会長

結構費用がかかるのですね。県の所有物であれば、著作権については問題ないのでしょうか。

○事務局

仮に、今後実現に向けて検討をする際には、そこも含めて事業者等と相談しながら進めていく必要があると考えています。

○小池会長

分かりました。現場からの声ということで、ぜひ検討いただければと思います。学習機会の提供のあり方について、もっとこういうやり方あるのではないかという意見はございますか。

○井口委員

公募委員の井口でございます。今、お話を伺っている中で考えたことですが、親世代が博物館や美術館に行ったことがあるのであれば、利用の仕方が分かっていると思います。私自身もそうですが、例えば図書館の使い方は学生時代に学んでいて分かっていたつもりですが、実際に都内の図書館に行くと利用方法や資料の調べ方などのガイドツアーを行っている館があったりします。要は館の使い方が分かっているからリピートするのだと思います。これは親世代にも当てはまるし、子ども世代や子連れの世代にとってはなおさらだと感じます。こんなことができるのだということを理解しているからこそ、子どもを連れていくことができると思うのですが、そこが全く分かっていない状態で、来館者数を増やそうとしても難しいのではないのでしょうか。確かにSNS経由で情報発信があるところに行ってみるというのはあるかもしれませんが、いつもの常設展示だけで来館者数を増やすというのは、なかなか厳しいのかなと感じています。

ハードルが高いと感じる理由の一つとして、私もそうですが、行ったことのないところに行ったら何が得られるのか分かりかねています。その部分の解消の手段が、実際のリアルでやるのか、それともSNSや動画などのバーチャル空間、ネット空間でレクチャーするのか、そこはいろいろな手段が考えられると思います。私はどちらかというと、学校や家族単位で現場に来てもらって、最初の30分や1時間はその館でどんな新しい知識が得られるのか、使い方をレクチャーするのが良いと思っています。アンケートの中で、「しずかに落ち着いて楽しみたい」と回答された方もいらっしゃいましたが、そこは音声ガイドの機能を活用したり、あらかじめレクチャーの時間帯を設定しておいて、「この時間帯は賑やかになる時間が発生しますよ」というアナウンスをしておくことで対応してはいかがでしょうか。何も1日中静かにしていないといけないという決まりをつくる必要はないと思いますし、ましてや公共の施設でしたら、現実的にも難しいと思います。

また、私はドライブをするのが趣味なのですが、神奈川県は道の駅が少ないように感じています。千葉県などでは道の駅に立ち寄って野菜などの地場産物を売っていて、結構お客さんが多いです。博物館や美術館は観光施設として目に留まる人が多いと思いますので、地場産物を売ったり、キッチンカーを誘致して、その地域にお金を落としてもらう取組をしても良いのではないのでしょうか。特に親子連れは食事のことを気にする方も多いと思うので、食事とセットになっていれば、もっと利用しやすくなると思います。県立館は東西の端々にあって、県央部にあるわけではないので、交通アクセスの問題もあり、自家用車で訪れる方も多いと思います。そうしたことを考慮す

ると、食事までできた方が需要を満たすことができるのではないのでしょうか。ただ行って帰ってくるというだけではなく、そういった付帯的な機能を持たせても良いのではないかと考えました。

○小池会長

現状、ミュージアムショップやレストランだけの利用でも良いということを、多くの方は知らないですね。きっとお金払わないと使えないのだろうと考えている人が多いと思います。常設展についても、実は無料で入ることができたり、入場料がかかったとしても特別展ほどは高くないということを知らないから、敷居が高くて行かないという話につながっていくかと思います。博物館や美術館、特に県立レベルだと、なんとなく堅そうで決まった人たちしか訪れないイメージがあります。こういったイメージを払拭するための、初歩の初歩を教える施設活用術、リテラシー教育をする必要があります。大学の図書館ですら、一年生向けに講義を行っています。こういった社会教育施設の堅苦しさ、意識の高いアカデミックなイメージを、いかにして親しみやすいイメージに近づけていくかという視点で、啓発教育のようなものを出前講座のような形でできると良いのではないかと御意見でした。どのようなところに出前すればよいのでしょうか。話し合うことの2つ目ですが、社会教育施設の使い方などの情報を、どのように届けば良いのだろうか、存在そのものやこんな機能があって楽しいところなのだとすることを、届けていくための方法について話し合っていきたいと思います。

○大村委員

神奈川県議会議員の大村悠でございます。聡明な御意見ばかりなので、なかなか抜本的な意見を申し上げるのは難しいのですが、これまでお話のあった通り、敷居をどうやって下げるか、情報をどうやって届けるかという点が根底の課題であると認識しております。そんな中で、各館では展覧会を実施していると思うのですが、先ほど浜野委員がおっしゃっていたように、動的な体験ができるイベントを開催するということできれば、これまでの学びたいという層だけではなく、休日家族で楽しく過ごしたいと考えている層や、何もすることがないから博物館に訪れてみたという層に対してもアプローチできるのではないかと考えています。特に、地域連携というキーワードが本日の報告に挙がっていましたが、市民フェスタや区民フェスタなどの地域のイベントに出店できないのかなと思っています。展示物をすべて持っていくことは難しいかもしれませんが、移動ができる資料を持っていったり、ワークショップみたいなものができると、学習機会の提供の手前にある「認知」や「関心」といったところにフォーカスできるのではないかと考えています。

また、金沢文庫には駐車場がないので集客が難しいのですが、隣接している称名寺は桜や紅葉がきれいで、歴史的にも観光地的にも、多くの方々が訪れています。そういったところとの導線を上手く広げていけないかと考えています。直接的に施設に来てもらうということに加え、近隣の施設に訪れた人にも立ち寄ってもらうといった、施設間の連携を図ることについて、もっと検討の余地はあるのではないのでしょうか。

○小池会長

どうすればもっと身近に感じてもらえるかというのは難しい課題ですよね。

○平井委員

知ってもらうというお話については、2つのポイントがあると思っています。具体的には、単純に博物館が圧倒的に知られてない、存在が認知されていないという点と、これまでの情報の出し方だけでは不十分であろうという点が考えられます。

例えば、千葉県立中央博物館は、国立館レベルの学芸員の人員配置がなされていて、自然史や科学系の博物館としては、業界の中でのすごく有名な施設になっています。しかし、千葉県が5月に結果を公表した「県政に関する世論調査」では、「利用したことがない」の回答が85.7%、で、うち「県立中央博物館を知らなかったため」の回答が69.9%でした。業界の中では非常に有名な館にも関わらず、そもそも約7割の人は知らないというのは驚きの結果でした。回答者数は1,762人ですので、本当に県民の7割が全く知らないのかというと、必ずしもそうとはいえませんが、傾向として知らない人が多いということは言えようかと思います。この結果を踏まえると、神奈川県にも県立の博物館・美術館が4館設置されておりますが、所在地を含めて県民の方々がどれだけ知っているのかというのは、改めて考え直す必要があるのではないかと思います。

また、「日曜美術館」という有名な美術番組があるのですが、その番組に取り上げられると、もともとそこまで来場者数が多くなかった館が、翌日から行列ができるようになることがあります。この現象は、決して番組の放映前後でプロダクト自体は変えていないにも関わらず起こります。

やはりポスターやチラシのアイコンニックな写真と、企画展でこんなことをやっていますという情報だけを伝えても、何も響いていないということだと思います。博物館に行きたいと思ってもらえるような情報が、実は今まで何も発信できていないのではないのでしょうか。井口委員からおっしゃっていたように、例えば「博物館に来たらこんなふうになれる」「こんないいことがある」ということが、そもそも博物館に親しみのない人にとっては、何も思い浮かべられていません。そのため、やはり博物館というところはどういう施設で、訪れるとこんな良いことがあるのだということを、企画展のPRではない形、それこそ使い方や楽しみ方などを伝えるようなPRが必要なのではないかと思います。そうした意味では、浜野委員が館長を務めている平塚市博物館は、入館料が無料で、平塚市民が小さい頃から非常に親しんでいます。大人になっても来たことのある方が非常に多い博物館です。来館者がしっかり育っているという印象をすごく受けるので、やはり来館した回数、親しんでいただける回数というものを、どうやって増やしていくのが重要だと考えています。

○小池会長

何がいいのか、何が楽しめるのか、という情報を発信し、小さい頃から社会教育施設に親しみを持ちながら過ごしてもらえると、どんなに素晴らしいことかと思っています。

私が勤めている大学の図書館でリテラシー教育をするときに、「図書館での調べ方はこうです」と教えても全然響いてくれません。新聞記事をデジタルデータで検索する方法を調べるということを教えるのですが、自分の生まれた日の新聞記事を引き出せるようになるというと、やっとな食いついてくれるようになります。自分の生まれた日にどんな事件があったのかということを調べた上で、「自分の生まれた日新聞」というものを作って、授業の課題として提出してもらおうと、素晴らしい作品が出てきます。

教員を目指している人は、教育問題についてたくさんピックアップする生徒もいますし、三面記事だけ、料理の記事だけ、という生徒もいます。「先生の生まれた日は西暦何年の何月何日ですか」と質問されるので、「それはトップシークレットです」なんて幸せなやりとりをしています。図書館でこんな楽しいことできるなんて初めて知った」という感想を寄せてくれる生徒もいて、楽しみと学びがつながってくる、そういう経験を小さい頃から積み上げていって、ロコミで「あそこに行くと楽しいよ」と広がっていけばいいと思いますよ。

○すとう委員

私も子どもの頃の経験というのは非常に大きいと考えています。県立青少年センターには、かつてプラネタリウムや展示室がありまして、子どもの頃に訪れた記憶が今でも鮮明に残っています。

一方で、今回のアンケートの集計結果は、さらに分析してみると良いのではないかと思います。もともとの調査前提は「子どもから親世代への巻き込み」というものでしたが、実際は親からの子どもへ情報提供しているケースが一番多かったという結果になりました。この情報の流れが分かったことは、非常に重要なことだと感じました。事前の予想では、子どもたちの自発的なインターネット等への情報接触があるのではないかという予測があったと思うのですが、やはり親御さんの影響力が非常に大きいということで、親御さんを通じて子どもに伝えたい情報をしっかりと渡していくことが大切だということが、調査結果から感じました。そのため、プロモーションの中身やプロダクト面など、色々検討することはあるのですが、子どもと近い関係の方に、子どもたちへ伝えたい情報を渡していくというのが重要な視点ではないかと思いました。この後、答申の構成案が議題として出てくるかと思うので、そこも含めて検討していけばよいと思います。

○小池会長

ありがとうございます。まだまだ御発言いただけてない皆様には、一言ずつお願いしたいところですが、オンラインで御出席くださっている佐藤委員、いかがでしょうか。

○佐藤委員

なかなか発言するタイミングが掴めなかったもので、ありがとうございます。

社会教育施設の情報をいかに届けるかということで、これまでの御意見と重複する部分があるかもしれませんが、対象者ごとに情報の届け方を変えていくということが大切だと考えています。子どもや保護者、学生、教員、高齢者など様々な属性の方がおりますので、それを一括りにするのではなく、誰に何を届けたいのかということを明確にして、内容や媒体を考えていくということが重要です。やはり高齢者の方はなかなかスマホを使いこなせない方も多いですから、チラシ等の紙媒体のものを、そういう方々がよく集まる場所に配架していくという工夫が必要だと思います。

また、個々の社会教育施設が、個別ではなく、一体的に情報を発信したり、皆でつないでいくというやり方も必要になってくるのではないのでしょうか。お互いの相乗効果で、社会教育施設の使用率が上がっていくというところにつながっていくと思いますので、そういった学びのネットワークを構築してもらいたいです。歴史、美術、自

然など様々なジャンルの施設があると思いますが、何か共通のテーマでつないでいき、「次は別の施設でも学んでみたいな」と思えるようなネットワーク化を図っていくことができる、それぞれの施設の来館者数も増えていくのではないかと思います。イベントや年間を通じた季節ごとで良いので、そういった学びの仕方を提供してもらえると、利用者も「この社会教育施設は面白かったね」「学んで良かったね」と口コミで発信していつてもらえるのではないのでしょうか。

また、仕掛けも重要だと思います。例えば子どもや親御さんが、自分の気に入った展示や発見したことを紹介したり、子ども目線の展示解説をつくったりするなど、学んだ人が次の人へ学びを届ける仕組みを作ってみてはどうでしょうか。そういった利用者目線で、利用者の方が次の社会教育施設に来てくれる人へ学びをつなぐような仕掛けを作っていきたいです。

情報をいかに届けるかという点では、利用者の視点も重要だと思うので、そういったところもこれから充実していけば良いのではないかと思います。

○小池会長

ありがとうございました。続いて吉原委員、いかがでしょうか。

○吉原委員

神奈川県社会教育委員連絡協議会から出ております、吉原と申します。私は社会教育委員として、茅ヶ崎市を中心に活動しています。公民館や博物館といった社会教育施設が、その館独自で何か事業を展開し、多くの人に知ってもらい、来ていただくというのは非常に大変です。私自身、地域の公民館と別の施設を連携させていく、地域の人を巻き込んで何かを行うといった活動させていただいています。

茅ヶ崎市博物館では、子ども向けのスペースが充実しており、赤ちゃんと保護者で来ていただいて、子どもたちがその辺でハイハイしたりしていたり、子どもが眠くなってきたらそこで寝ることもできるような形で設備を整えています。また保護者の方が博物館の中を見学して、そこに学芸員さんが説明をしてくださるというような形もっています。

博物館の取組としては、最初は読み聞かせのようなものを取り組み、次は皆で童謡のような歌を歌って楽しみましょうという取組を行っていました。こうした形で、少しずつステップアップを重ねていて、とても良い形で取組を進めておられます。

また、この博物館は茅ヶ崎市の北側の山の方にありまして、そのエリアはとても文化財が出土していますし、施設もたくさんあります。その中で、例えば夜に、博物館に子どもたちを集めて怖い話をして、学芸員と一体となって何か課題に取り組んだり、夜の博物館を見学したりするなど、色々な取組を行っています。学芸員が幼稚園や小学校、公民館などで出前講座を行い、子どもたちと交流することで、次は子どもたちが保護者を連れて、一緒に博物館に来ていただけるような形を作ってくださっています。

市立の博物館ですから、すぐに何か大きなことが取り組めるわけではないかもしれませんが、今、とても良い形で進んでいますので、本日皆様から伺ったお話を、逆に今度は私が茅ヶ崎市に戻って、何か良い形で生かしていければ良いなと思いました。

○小池会長

721 ありがとうございます。最後に大橋委員、お願いいたします。

722 ○大橋委員

723 神奈川県経営者協会の大橋と申します。私は普段、高梨乳業という乳業メーカーで
724 勤務していて、食育という形で学習機会を届けています。工場見学に来ていただいた
725 り、小学校や施設に出張授業に行ったりして、「牛ってこんなに大きいんだよ」「牛っ
726 て妊娠して子どもを産んで、やっと牛乳が出るんだよ」「牛は4つの乳頭から牛乳を出
727 しているんだよ」といった形で食育の取組をしています。そうした活動を通じて、子
728 どもたちに牛乳の大切さ、素晴らしさ、栄養素というものを学んでいただいて、そう
729 した方々が大人になり、次の世代に伝わっていけば良いなと考えています。

730 他には、バターづくりの体験も行っています。カップを振ってクリームを分離させ
731 てバターを作るという体験活動を行いながら、牛乳の素晴らしさを伝えています。

732 議題（２） 答申骨子案について

733 ○小池会長

734 ありがとうございます。それでは最後になりますが、これまでの御意見を答申に
735 反映させていきたいということで、資料2を御覧ください。

736 【資料2により説明】

737 私たちは「社会教育施設の機能強化について」というテーマで神奈川県教育委員会
738 の教育長から諮問を受けていますので、これまでの検討を踏まえて「こういうことを
739 なさった方が良いのではないか」という政策提言や、「こういうことができていて素晴
740 らしい」といったことを教育長に答申という形でお答え申し上げることになります。
741 本日はその柱をどのような内容にしていこうかっていうことで、原案がここに示され
742 ております。

743 「1 はじめに」では今回いただいている諮問のことや、社会教育施設の現状がど
744 のようになっていて、今回の答申をまとめていくために、こういう議論を重ねてきま
745 したということを記載します。

746 「2 県立の博物館・美術館を事例とした社会教育施設の課題について」では、県
747 立の博物館・美術館での視察やヒアリング結果などの調査の内容について記載します。
748 また、本日の報告にあったアンケートについて、分析結果から見えてくることを記載
749 し、社会教育施設の課題は何なのかということをもとめていきます。

750 「3 提言」では、こうした内容を踏まえて、私たちの議論の成果として、行って
751 みたいと思ってもらえる魅力ある社会教育施設にするためには、何をなさったら良い
752 のか、また、本日の議論の内容も踏まえて十分な学習機会を提供できるようにするた
753 めにはどのようにすれば良いのかといった内容を書き込んでいきたいと思ひます。そ
754 して、まだ議論されていないところではありますが、やはり県の社会教育施設として、
755 国の中にあっても素晴らしく、さらには今後の未来にも耐えうる社会教育施設になっ
756 ていくためには、取り組んでいることをやりっぱなしではなく、しっかりと検証して、
757 さらに良いものにしていこうという観点で、評価というものをやっていく必要があるの
758 だということを、提言で論じていきたいと思っています。評価の視点から、何をこの
759 施設で取り組んでいく必要があるのか、できていることと、さらにこういうことをポ
760 イントとしてやっていく必要があるという提言をまとめていきます。

最後に「4 総括」では、第1章から第3章までで書いたものをまとめて、答申として申し上げたかったことを改めて総括していくという形で考えています。

このような骨子から、答申を作成していきたいと思います。そして、皆さんが今まで議論してきてくださったことは、事務局が全て記録としてまとめてくださっていて、どこにどういうことを書けば良いのではないかとということを、箇条書きのような形で意見の蓄積をされておりますので、それらを文章に起こしていくという作業を、委員の皆様にはやっていただきます。

そこで、執筆者の割り振りを行いたいのですが、「1 はじめに」「4 総括」については、私が諮問を受けて、私から答申をお渡しすることになりますので、小池が書かせていただきたいと思います。次に「2 県立の博物館・美術館を事例とした社会教育施設の課題について」は、「(1) 現地視察」を浜野委員、「(2) アンケート調査」を舟田委員にお願いしたいと思います。アンケート調査については、今回実施したものが子ども向けアンケートということで、被験者に少しバイアスがかかっているのも、もし資料があれば、他の調査内容を加えていただいても構いません。しかし、資料がなければできませんから、基本は本日御発表いただいたアンケートの内容を踏まえて、その分析から見えてくるものを記載いただければと思います。そして、「3 提言」の部分ですが、「(1)『行ってみたい』と思ってもらえる魅力ある施設にするには」「(2) 十分な学習の機会を提供できるようにするためには」という2つを伊藤委員にお願いをして、最後の「(3) 持続可能な運営ができる施設を目指すためには」という博物館や他の社会教育施設における評価というものを、どのような尺度で行っていく必要があるのかというポイントについて、平井委員に執筆をお願いしたいと思っています。

このような骨子と執筆担当者を原案としてお示しさせていただきましたが、御異議や御質問があれば承りたいと思います。いかがでしょうか。

<異議なし>

○小池会長

ありがとうございます。それではこのような骨子で進めさせていただき、各委員の皆様には執筆していただくということで、お願い申し上げたいと思います。

それでは、次回の会議までにやってくるのですが、今回は評価について話し合いたいと考えています。社会教育施設というのは教育施設なので、ニーズや要望に応えられているかといった指標だけではなく、社会教育施設としてどんな機能を備えていくべきなのか、そういった評価の尺度について議論していきますので、お考えいただければと存じます。

それでは、本日の議事はすべて終了となりますので、進行を事務局にお返ししたいと思います。円滑な議事進行に御協力いただき、誠にありがとうございました。

4 事務連絡<事務局>

5 閉会<事務局>